

---

# 日本国民参加型ゲーム

two

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

日本国民参加型ゲーム

### 【NZコード】

NZ0983N

### 【作者名】

two

### 【あらすじ】

平和な日本で突然始まった殺人ゲーム！！

ゲームクリアの条件は・・・

何人生き残れるのか？

それともゲームオーバーとなってしまうのか・・・

4月1日 カズヤ宅

10:00

けたたましいアラーム音が家中に鳴り響く。

こんな早い時間でだるいが早く起きて準備をしなければ。  
今日は絶対に遅れることはできない。

大学は春休み中なので、いつもは毎週ぎまで寝ている。

そんなおれだが、今日は早起きだ。

2

ゴイとのトークの約束があるからだ！

…まあ、まだ付き合つちゃいないが…今後付き合えればいいな…  
と。

おれはカズヤ。

大学3年生になつたばかりの20歳。  
趣味は野球。

野球サークルに所属。

バイトして遊んでの、典型的な大学生活を送っている。

今日のデート？のお相手はユイ。

大学2年生。  
サークルの後輩。

綺麗な黒髪が印象的だが、おっしゃる通りで守ってやりたくなる  
よつな可愛い子だ。

…12時に渋谷かあ、がんばるぞ！

4月1日 渋谷ハチ公前

12：03

やばい、まさかの遅刻…、せりぎつ間に合ひつと思つたが微妙に間に合  
わない…

せっかく早く起きたのに何やつてんだおれは…

まだ電車の時間まで余裕があると思つてコンビニに立ち寄つたのが  
いけなかつた…

まだ読んでない週刊誌が田口つき、ついつい立ち読みし始めたら、  
電車に乗り遅れてしまつた…

前の彼女と別れた原因がこれだ…

…全然おれ成長してないよ…

「「めん、「」めん。ちょっとバス遅れてて、一本電車乗り遅れたち  
やつたよ」

…じょうもない嘘をつくところも全く直らないか…

「だいじょぶですよ。今日映画ですよね？私、久しぶりの映画です

「ここ楽しみにしてたんですよ」

屈託のない笑顔があれの心拍数を押し上げる。

：がんばるぞ！

4月1日 渋谷某スポーツバー

19：10

映画を見て、しばらくぶらぶらした後、おれはコイとスポーツバーへ向かった。

おれとコイの共通点は野球好きとこいつ」と。

プロ野球が開幕し、一緒に野球を見れると思いつい、こいつを選んだ。

「あのシーンよかつたよね。思わず涙腺ゆるんだよね」

「そうですね！予告見た時からどうなるか楽しみだったんですけどまさかの展開で最後はすごい感動的でしたよ

今日見た映画は、コイが前から見たいと言っていた恋愛物だった。

正直、おれはアクションのほうが好きだ。



ユイを落とすためにおれは好みでもない映画を見て、柄にもないことをしゃべっている。

(さて、これからどうするか…サプライズを準備しているがどのタイミングかが大事だぞ)

ガガツ、ガガガー、ガガー

急に店内の野球中継をしていた巨大スクリーンの画像が乱れた。

そして、途切れた。

ザ―――

ザ―――

画面は砂嵐になってしまった。

カタ、カタカタ、カタカタ、カタタタタタタタタタタ…

砂嵐の上に何か赤い文字が浮かび上がる。

『日本国民参加型ゲーム』

「日本国民参加型ゲーム?なんだこれ?」

店内の客はみんなおれと同じリアクションだ。

店のなんかのイベントか?とも思つたが、従業員の一人はリモコンのボタンをあちこち押しており、

もう一人の従業員は配線の確認をしているのを見ると店のイベントでもないことがわかつた。

「おーい、ここも同じの出でるぞ!」

客の一人が自分の携帯を見せながら叫んだ。

おれも急いでジーンズの左ポケットから携帯を取り出す。

よほど慌てていたのか、携帯がうまく手に收まりず、携帯を落としてしまった。

床に落ちた携帯。

その画面にも……やはり……

『日本国民参加ゲーム』

砂嵐を背景に赤い字。

ゴイの携帯にも同じものが……

「キヤーーー、何これ？なんのこれ？気持ちわるい…」

見れば見るほど薄意味悪い映像だ。

砂嵐をバックによく日本のホラー映画で使われるような字体。

赤い文字からは少し血が流れているかのように見える。

その文字、言葉が砂嵐の中、震えるように小刻みに動く…

微かに消えてはまた網膜に焼き付けんとばかりに濃く浮かび上がる…

そこへ少し前に会計を済ませた常連客の一人が、ドアを叩き破る勢いで戻ってきた。

「外が大変なことになつてゐるぞー！」

このバーは地下にあるので周りの状況はよくわからなかつた。

おれは席を立ち上がり地上めがけて階段を駆け上がつた。

地上に出たおれを待っていたのは、

- 『日本国民参加型ゲーム』
- 『日本国民参加型ゲーム』
- 『日本国民参加型ゲーム』
- 『日本国民参加型ゲーム』

……

正面のビルの巨大スクリーン、

店頭に面したハイビジョンテレビ、

道行く人々の携帯、カーナビ……

恐ろしいあの映像が辺り一面を覆い、ネオンが輝く街を不気味な雰囲気に変えている。

ジー、ジジッ、ジジッ…

雑音と共に『日本国民参加型ゲーム』の字が消えて行く…

カタ、カタカタ、カタカタ、カタ

代わりに出てきた文字は、

『一億三千万分の一が犯人』

それと…画面の右上には小さく…

『130,000,000 / 130,000,000』

…と

ただ…、これは…、ゲーム…、です…

僕も…、何も…、しないで…、殺されるのを…、待つわけでは…、  
ありません…

僕は…、あなたたち…、日本国民…、全員を…、殺します…

あなたたちが…、僕を…、殺すのが…、早いか…、僕が…、日本国民を…、全滅…、させるのが…、早いか…

ちなみに…、現状を…、見ても…、わかるよひに…、僕は…、すでに…、日本の…、全ての…、電波を…、支配…、しています…

衛星も…、ジャック…、しました…

画面の…、右上を…、見て…、下を…

今…、

『一億…、三千万…、分の…、一億…、三千万…』

に…、なつて…、います…

僕が…、一人…、殺して…、いく度に…、分子が…、一ずつ…、減つて…、いきます…

『一億…、三千万…、分の…、一…』

に…、なるまでに…、僕を…、殺すことが…、日本国民の…、皆さんの…、ゲームクリアの…、条件…、です…

逆に…、それまでに…、僕を…、殺せなければ…、ゲームオーバー…、です…

僕も…、日本国民…、です…

最後の…、『一』…、は…、僕が…、生きている…、ことを…、表します…

生死の…、カウントは…、衛星に…、植え付けた…、生存者…、管理…、システムにて…、行います…

僕が…、死ねば…、この…、システムは…、停止…、します…

手始めに…、皆さんが…、油断…、している…、うちに…、稼がせて…、もういます…

映画が…、始まつて…、5分以内で…、死んでしまう…、最も…、ザ「ギャラ」…、さんたちは…、あなたたち…、ですよ…

…では…」

ドグオーネー  
ンゴーネーン

「キヤー、キヤー」

渋谷のあちこちで爆発が起き、爆発音と悲鳴が入り乱れる。

おれの目の前でも爆発が起きる。

閃光に目がくらむ。

手が触れるときメメメとまるこの感触、何かの生きしい塊、

目が開かなくとも自分の肌を通して伝わる現実、…

…逃げる…逃げる…

…ビリヒ…ビリヒ…

爆発は至る所で続いている。

…とにかく落ち着け、落ち着け、現状を把握しないと…

なんでおこるのか?…

何でここまで来たのか？

誰とここに来たのか？

…落ち着け、落ち着け…

ギュッと誰かがおれの手を握った。

「助けて！！」

おれは我に返つた。

「ユイー。」

そうだ、おれはユイと渋谷に来ていたんだ。

今、おれのやることはユイを連れてこの地獄から逃げることだ。

「ユイ、逃げるぞーとにかく走るんだ。あと絶対におれの手を離すなー。」

爆発は収まる気配はない。

遠くの方からは火柱があがり、辺りは黒い煙が立ち込めている。

人間は将棋倒しになり、人が人の上を逃げている。

足元は血の海となり、人間だったものが辺り一面、折り重なるように散らばっている。

「コイ、田を開けんなよー。」

おれはコイを守るーその一心だけで、無我夢中で逃げた。」

4月1日 渋谷隣接郊外

21:35

どれだけ走り続けたか…

渋谷からはだいぶ離れたようだ。

周りには同じように逃げて来た人達が疲れ果てて座り込んでいる。

ユイを見ると、ユイもこれ以上走るのは限界のように見えた。

「ソルまで来ればだいじょぶだろ? からひよつと休もうか」

ユイは黙つて頷いた。

渋谷の方角を見ると夜の空が赤くぼやけて見える。

もつ爆発音は聴こえない。

代わりに救急車のサイレンの音が微妙に聞こえてくる。

「オニツ

少し前まで、あの悪夢のような場所いたと思つたがしてまた。

コイを見ると、ずっと黙ったまま、しゃがみ込み下を向いたままだ。

あれほど惨状…

人間はあんなにも簡単にバラバラになつてしまつのか…

人間からはあんなに多くの血が流れるのか…

人間の悲鳴とうめき声が頭の中で繰り返し繰り返し再生される。

きっとユイもそんな状況なのだろう。

こんな中、意外におれは平常心を保てた。

目の前で起きたことを思い出すと気持ち悪くなるが、自然と頭は冷  
静だった。

この方向に逃げてきたのもただやみくもに逃げてきたのではなく、

暗い方、静かな方を選びながら走ってきた。

携帯を開くと好きなグラビアアイドルが水着姿で微笑んでいる。

画面は通常に戻っていた。

ただ画面の右上には、

『129-261-550/130-000-000  
129-261-549-129-261-548-129-  
61-547-』

これだけはいつものおれの携帯とは違つた

『ウッド・ベル』

そいつの話が本当なら…」それだけのことがあったのだから、本當なのか?

この画面の右上の数字が表しているものは、あの惨劇で死んだ人の数を表しているのだろうか?

すでに80万人…?

「ほら、渋谷も大変なことになってるみたいだよ」

「あら、ほんと大変ねえ。この辺りにいる人達は渋谷から逃げてきたのかしら」

近所の人々がベランダから渋谷方面を見ながら話をしている。

渋谷があんなことになつてているのに、日本人は自分のことでないと完全に他人事だ。

ただ、“渋谷も”という近所の人の言葉が気になつた。

「すいません、今“渋谷も”と言つてましたが、他にも何かあつたんですか？」

「そうよ、今いろんなところで大変みたいよ。テレビは今みんな“同時多発テロか？”って騒いでて。

渋谷以外でも、札幌や仙台、新潟、長野、名古屋、大阪、広島、那覇と各地でテロが起きてるのよ。

『ウッド・ベル』とか名乗ってるやつが犯人らしいけど…」

ブツーー、ブツーー

急に携帯が震えた。

「あつ、またテレビ砂嵐になつたわよ。また『ウッド・ベル』出でくるみたいよ」

いろいろ教えてくれた人は、そう言ってベランダから家の中に戻つて行つた。

おれは恐る恐る携帯を開いた。

また砂嵐だ。.

そこに徐々に大きく映し出された。.

『129 - 081 - 115 / 130 - 000 - 000 - 000』

文字が浮き上ると、またあのくりウムを吸つたよつながらだけた声が聞こえてきた。

「監さん、いかが、でしたら、しょうか。

最初に、100万、ポイント、へりこはと、思こ、ましたが、予定より、やや、シート、しました。

今現在、918-8856の、死亡が、確認、されました。

「冥福を、お祈り、します」

「チーン」

「初めての、ゲーム、どこいとど、監さん、お疲れ、かと、思います。

今日、この後、だけは、何も、しない、ことを、お約束、しますので、

「今日は……、ゆづくつと……、お休み……、下せこ……」

「ふざけんなよーなんだよこれーゲームってなんだよー。こいつは死  
にせりになつたんだよーくそつー」

「……ねえ、……カズヤ先輩、……家に……帰りたい……」

ユイがやつとの声でボソッとつぶやいた。

辺りをみると、逃げてきた人達は、まだ座り込んでいる者もいるが、それぞれ重い足どりで歩き始めている。

まだ混乱している者、現実を受け入れた者…

「そうだねユイ、早く家に帰るわ。ちゃんと送つていくからね」

幸いなことに電車は止まっていたが、渋谷とは関係のない路線のバスは動いていた。

バスは非日常だったおれとユイを日常のように運んでいった。

「一人でだいじょぶ? 今日一緒にいよっか?」

こんな時だ、別にやらしい気持ちで言ったのではない。

ユイもおれも一人暮らしで、ユイを一人にするのは心配だった。

「…だいじょぶです。今日は本当にありがとうございました」

「ほんとにだいじょぶ? 何かあつたらすぐ電話してね。すぐ駆け付けるから」

おれ自身一人になるのがちょっと怖い部分があった。

ユイにおやすみを言うとおれも一人暮らしをしているアパートへ帰った。

4月1日 カズヤ宅

23・36

部屋へ入るなり、張り詰めていた緊張の糸が切れた。

こじはいつもおれが普通に過ぐしている部屋だ。

漫画は読みっぱなし、服は脱ぎっぱなし…

おれは朝起きたままの布団がめぐれっぱなしのベッドに倒れ込んだ。

…疲れた…

ふと携帯を見ると、着信あり、受信メールありになっている。

ユイからか？

『カズヤ大丈夫？渋谷から少し離れてるから大丈夫だと思つけど、無事ならいつたん連絡ちょうどだいね 母』

おれは、

『大丈夫だよ

とだけ打ち込み、送信した。

ユイに電話しようかどうか迷つたが、今日は大変だつたね、といった簡単な内容とおやすみ、だけを入力しメールだけで済ませた。

長い4月1日が田を閉じることで終わる。

ただ、田を開じてじっと明日にな。

明日以降は何が起きるのか？

次の日起きたら夢だつたらいいなと思いつつおれは田を閉じた。

4月2日 高知県 ヒテ宅

10：55

朝からテレビでは、昨日起きた国内9ヶ所同時多発テロの話題しかやつてない。

まあ、当たり前といえば当たり前だ。

幸いといつていいのか、四国ではどこも被害を受けていないが、テレビを見る限り各地かなり悲惨な状況になっている。

2001年のアメリカの同時多発テロの時は、外国と云ふこともあり危機感は全然わからなかった。

自分が住んでいる国で起きたら、頭がおかしくなるだらうと思つていた。

しかし今回、日本でテロが起きたが、自分がその現場に居合わせていなければ、危機感は全くわいてこない。

むしろ、どんな感じか生で見てみたいという好奇心がわいてきた。

…人間つてこんなもんだよな…  
とため息をついた。

テレビ画面の右上には相変わらず例の数字がカウントされている。

『128・355・680／130・000・000』

昨夜よりも70万人も減っている。

カウンターは今もなお動き続けている。

この一晩でこれだけ多くの人が苦しみ亡くなつていつたということ  
だ。

そして、今この瞬間にもどこかで誰かが亡くなつているところだと  
だ。

とにかく自分でなくてよかつたと思いつつ、大学のサークルへと向  
かった。

4月4日 四国全土

4 : 4 4

いつせいに画面が消え、砂嵐になつた。

カタカタ、カタツ、カタカタ

画面に文字が打ち込まれていく音だけがまだ夜明け前の静寂さの中に響く。

『シコクザイジュウノミナサン、

オハヨウゴザイマス。

イマカラ、

シンデクダサイ。

ドクガスヲマキマス。

タスカルホウホウハ、アリマス。

ニゲルコトガ、

スベテデハアリマセン。

マズハミナサン、

ゲームニサンカデキルコトヲイノツテイマス。

…デハ…』

カタツ、カタカタ、カタ

『シコクヘン』

カタ

『四國編』

4月4日 高知県 ヒテ宅

5：15

なんだか外が騒がしい。

昨日も大学のサークルの飲みで、帰つて来たのは3時過ぎだつた。

これじゃ、眠くても眠れない…。

あまりにも騒々しいので、ヨタヨタしながら部屋のカーテンを開けてみた。

視界に飛び込んできたのは慌てふためく人、人、人…。

車は猛スピードで、人混みの中を走り抜けていく。

「ん? なんだ?」

あまりにも異常な雰囲気だったので、急いでサンダルだけ履いて外に出でみた。

・・・・・

「すいません、毒ガスってなんのことですか？」

「あー、もう時間ないんだよー携帯見てみろよーいいから手、離せー！」

……携帯？

男はおれが一瞬手の力を緩めたのを見逃さずに手を振りほどいて逃げて行つた。

おれは急いでポケットから携帯を出して開いてみた。

……  
……

昨日まで平穏な生活を送ってきた。

3日前のテロをニュースで知った時も楽観的にしか考えていなかつた。

理解するのに数秒かかった

…やばい

初めて危機感が込み上げてきた

おれはまよー一番仲のいいアキオに電話をした。

アキオはまだ寝ていたが、今の状況を説明すると電話口でもアキオの酔いがさめしていくのがわかつた。

「ヒート、これからビーツあるよ。」

「どうあるつて言われても、3日前の」ともあるから逃げなことや  
ばいだるー。

逃げてる人の話だと、四国から出ればだいじょぶつて話だから。ア  
キオ、おまえ車出してくれー！」

「車か…わかった。すぐ準備してヒートんとこ迎え行くよー。」

「あと、アキオの車5人乗りだよな?ハセガワといワキ、マツナミ  
に連絡しとくから3人も頼むー。」

「了解、みんな近くだから15分でみんな拾つてくよー。」



20分後、予定より5分遅れてアキオの車がアパートの前に止まつた。

ハセガワ、イワキ、マツナガももう車に乗つてゐる。

アキオはある程度荷物を準備していたようだが、他の3人は着の身着のまま出でたようだ。

おれも荷物という荷物はないが、携帯、充電器、現金、免許、簡単な筆記用具は持つた。

あとは小さい頃から肌身離さず持ち歩いつづけるお守りくらいだ。

「ヒテ、急げ！もう道かなり混んでるぞ！」

おれが車に乗ると車はすぐに発進した。

「道だいぶ混んでるよ。『毒ガス予告』から30分くらいしか経つてないのにやつぱりみんな混乱してるよ」

「くそー歩道通れよ！避けてくれのめんどくせえな！」

「つてか、信号意味ないね。人も車もチャリもみんな信号無視だよ。車線も関係ない感じだね」

「じょうがないでしょ。みんな自分が逃げるのに必死なんだよ」

「まあ、おれらもそのうちの一人だからね…」

車の外を見ると、30分前の比ではない。

なかなか車もスピードが出せない。

人混みを掻き分けてやつとのことで交差点を曲がる。

ふと、急いで駅に向かっている人の中に知つた顔が見えた。

同じサークルのタカハシだ。

普段から妙なテンションで無駄に絡んでくる奴で、正直嫌いな奴だ。

おれは一瞬目が合つたが、気付かない振りをした。

しかし、向こうは気付いていた。

人の間をぬつて、おれらの車によつてきた。

アノン、アノン、アノン

「おい、おれも乗せやよー。ドア開けるよー。おまえらだけ車で逃げん

のはずりいぞー早く開けろよーおーっー

勢いでマジナミがドアを開けようとした。

「マジナミ開けるなー。」

アキオが叫んだ。

「この車は5人乗りなんだ。あいつは乗せられない」

「えつ？でも…」

「ただでさえ5人乗ると狭いんだ。あいつが乗るスペースはないよ。」

あとおれタカハシ嫌いだし。

あいついつもおれらの悪口隠れて言いまくってんだよー。マジナミも知つてんだろう？」

「それはそうだけど…」

確かにアキオが言つとおりだ。

タカハシはいつも仲のいいおれら5人組の悪口を他の人に言いまくっている。

それだけじゃない。

あいつに何か頼み事をしても一度も聞いてもらつたことはない。

タカハシはそんなやつだ。

「席が開いてるならまだしも、満席の状態でタカハシを乗せるのはおれも反対だよ」

おれはアキオの意見に同調した。

アキオとおれが反対したことで、タカハシは車に乗せない、ということになつた。

マツナミもハセガワもイワキもタカハシを普段からよく思つてなかつたせいか納得したようだ。

アキオはタカハシを無視して、アクセルを踏んだ。

「おいつ、待てよー待てつて！止まれよ！」

タカハシは車の窓を必死で叩きながら追いかけてくる。

「アキオもつとはやくー！」

「速くって言われても、人が邪魔でなかなかスピード出せないよー！」

車はタカハシをなかなか振り切れない。

それどころかスピードが落ちるとドアの取っ手をつかみガチャガチャやつてくる。

100メートル程そんなことを繰り返していたが、ドンッといつ音とともにタカハシの姿が見えなくなつた。

すると、急にフロントガラスの方からタカハシの逆さまの頭が覗いた。

タカハシは逆さまの状態で顔をフロントガラスに押し付け、フロントガラスを叩きだした。

「わっ、なんだこいつー。やばこどうしよー。」

と言しながらアキオはハンドルを左右に切る。

タカハシも鬼のよつな形相で、車から振り落とされないよつにじがみついている。

しかし、車が一瞬ブレーキをかけた瞬間、タカハシはおれたちから離れて行き、穴に吸い込まれるかのようにあつという間に視界から消えた…

デンシ、デゴン、ズン、ゴンシ

シートベルトをしていたおれの身体が2回激しく上下した…

おれは…おれたちは何が起きたのか、みんなわかつていた。

ただ、自分たちがしてしまったことで身体が固まってしまった。

アキオはハンドルを両手でしっかりと握ったまま、目を見開き前を凝視している。

おれは固まつた身体の中で唯一動いた眼球を使って、ゆっくりとサイドミラーを見た…

仰向けてヒクヒク動いているように見える人間がミラーに映った。

その人間が微かに頭を動かすとサイドミラーレンジに目が合つたような気がした。

と次の瞬間、後続の車がその人間を飲み込んでいった…

アキオは黙つたまま前だけを向き運転を続いている。

後部座席の3人も無言のままだ。

おれも何も話せない…

最後に見たミラー越しのタカハシのあの目が頭に焼き付いたまま離れない。

「なあ、悪くないよな…、…おれが悪いわけじゃないよな…」

アキオがたまらず口を開いた。

「だつて、もう定員いっぱいだから乗れないよな?

それなのにあいつが車叩いたり、車の上によじ登つたり… 実際あの時、もうあいつが邪魔で前も見えなくて…」

アキオは自分のことを正当化するかのように卑口でまくし立てる。

おれも重い口を開いた。

タカハシがこうなったのはおれがアキオの意見に同調したからであり、おれにも責任がある。

「……」自己を正当化しておかないと持たないと思つた。

「やうだよー乗れないもんは乗れないんだから、それを無理矢理乗らうとしてくるあいつが悪いんだよ！」

あいつが諦めていればこんなことなんなかつたんだろう？ あいつのせいだよ！

そつこいつも頭の中では、サイド//ドアに映つたあのシーンが何度も何度も繰り返されている。

「とにかく今は逃げないと……」

6・15

朝起きてから1時間。

もう昨日までは遅い。

『ウッド・ベル』の四国毒ガス予告だけでおれの日常が日常でなくなってしまった。

現におれが乗った車で人をひいてくる。

この混乱した中で、そのことを理解してしまつ自分がいる。

ただ、それよりも今は一刻も早く四国から逃げなくてはならない。

四国を車で出るには、3つのルートしかない。

一つは、今治から大島、伯方島などいくつかの島を通り広島に渡るルート。

2つ目は、坂出から瀬戸大橋を通り岡山に渡るルート。

3つ目は、鳴門から淡路島を通り兵庫に渡るルート。

他にフェリーなんかもあるがまず乗れないだろう。

今、高知にいるのでもまずは高知道を北上する。

問題は高知道の川之江にてだ。

川之江にてがこの3つのルートのどいを選ぶかの分岐点となる。

10：03

「ハル、どうする。もうひまはないだよ。さっそく行へへ？」

アキオが久々に口を開いた。

こっちを向いた田は徹夜明けのように疲れ切っていた。

「そうだな、正攻法で最短距離を行くか、裏をかいて遠いほうで行くか…

あと、アキオ、運転代わるから、しばらく後ろで休んでたらいいよ

渋滞の中、じて直前で車を側道に止めアキオと運転を代わった。

おれは運転を代わると同時に他の車がどこに向かうのかを注意深く観察した。

ここがポイント、ここを外すか当てるかで運命が変わる。

普段、遊び人の大学生だが妙に頭が働く気がした。

「鳴門で行こう」

渋滞の列に戻るとおれはなんの迷いもなくみんなに行き先を伝えた。

「…鳴門つて一番遠いんじや…」

みんなからそんな声も上がったが、

「だいじょぶ、鳴門でだいじょぶだから」

「こうあれのなぜだか説得力のある言葉で一番距離のある鳴門に向かう」とになつた。

19：16

もうかれこれ半日以上たつ。

中身の全くない、異様に長く感じる時間だけが無駄に過ぎていく。

車のステレオから流れる『ユースは『ウッド・ベル』のことだけで  
もつ耳をふさぎたくなる状況だ。

さすがにうんざつしてスイッチを切ろうとした瞬間、カーナビの画面  
が赤く染まり、そこから血みどりになつた文字が浮かび上がつて  
きた。

『四時間四十四分』

「4時間44分？4時間44分…なんだこれ？」

血が滴り落ちる文字が頭に焼き付く。

時間が経つにつれなぜだか冴えてくるおれの脳みそが時計に目を向けさせた。

「…残り時間か」

日付が変わるまでの時間…

日付が変わると何が起きるのか？

毒ガスがまかれるのか？

しばらくするとカーナビにまた別の数字が浮かび上がってきた。

『候補者2556285名』

「…でもおれの脳みそは瞬時に候補者の意味を理解した。

「…四国内に残ってる人数か。候補者…」

候補者という言葉が何かひつかかる。

なんの候補者なのか。

ただ、今は言葉の意味を直感で捕らえられるほど感覚が研ぎ澄まされていった。

『四十四分四十四秒』

カーナビの数字がゆっくりと血が流れるよつに書き換えられた。

よく『四』は『死』だから縁起が悪い数字だとされてきた。

たしかにこの状況でこれだけの四を並べられるとそれを実感するの  
は容易だ。

『候補者2139952名』

カーナビに浮き上がる数字と候補者という言葉の意味を考えている  
間に、鳴門大橋まであと数キロの所まで来ていた。

「鳴門大橋だ、もうちょっと、もうちょっとで鳴門大橋だよ。間に  
合つ、間に合つよー。」

アキオが視界に飛び込んできた鳴門大橋を見て叫んだ。

ハセガワ、イワキ、マツナミの後部座席の三人も前に体を乗り出し、アキオを急かしている。

アキオと交互に運転をしてきたおれだが、一二二、三時間は助手席でずっと頭をフル稼動させていた。

「候補者……タスカルホウホウ……」

ウッド・ベルの言葉が気になる。

『タスカルホウホウハ、アリマス。

ニゲルコトガ、

スベテデハアリマセン。

マズハミナサン、

ゲームニサンカデキルコトライノツティマス』

たしかこう言つていたはずだ。

逃げることが、全てではない…

ゲーム

候補者

23・25

「くそつー。せつきから全然進まねえよ」

考え込んでいたおれは、アキオの苛立った声で我に返った。

ふと外を見ると鳴門大橋は10分前とほとんど同じ位置に見えた。

「10分でほとんど進んでいなーようだ。」

外を歩いている人にどんどん抜かされて行く。

「ねえ、これ進まないのって前方の人達が車乗り捨ててるからじゃない?」

マツナミの言葉通り、車を降りてみると前も後ろも至る所で車から人が出てきていた。

「ちくしょう! 車捨てろってことか! ? くそつー! 」

アキオが悔しがるのもよくわかる。

この車はアキオがずっと欲しがっていた車で先日やっと手に入れたものだつた。

しかし、状況が状況なのでアキオもすぐに觀念した。

おれらは車をその場に乗り捨て、鳴門大橋へと向かう列に合流した。

車を捨て、うなだれているアキオにマツナミが付き添つて歩く。

そんな姿を視界の隅に置きながら、おれは頭の中で反復していた。

…逃げることが全てではない…

…ゲームに参加できることを祈っている…

「よかつた、間に合つた、鳴門大橋に着いたよ。早く渡りつい…」

イワキの声が聞こえ、おれはふと時計を見た。

「…23時35分かあ」

『四分四十四秒』

『候補者2067055名』

そろそろと思い、携帯を開くと画面にはそう表示されていた。

「おー、ヒート。ホントにおまえを信じていいんだろうな？もし違つてたらおれら…」

目の前を大慌てで通り過ぎ、橋を渡つて行く人達を見つめながらアキオが聞いてきた。

23時35分に鳴門大橋に着いたおれらは、人の波に流されるように橋へと足を踏み入れよつとしていた。

アキオもハセガワもイワキもマツナミも安堵の表情を浮かべていた。

同じように必死で逃げてきた周囲の人達の顔も心なしか明るく見える。

「アキオ、ハセガワ、イワキ、マツナミ。おれを信じてくれるか?」

押し寄せる人の流れの中、おれは4人を呼び止めた。

おれの頭の中は鳴門の大渦のようにウツド・ベルの言葉が渦巻いていた。

この昨日までとは違う世界に危機感を感じながらも同時に好奇心もわいてきている。

頭は幸いにもかつてないほど冴えている。

「逃げないほうに賭けてみないか?」

おれは冷静な口調で言つたが、家から逃げる時に持ち出したお守りをポケットの中できゅっと握りしめていた。

結局、おれの予想外の問い合わせ入れてくれたのはアキオとマツナ

ハセガワとイワキは猛反対し、橋を渡るほうを選んだ。

「大丈夫…、大丈夫だ。…おそらくこっちが正解なはず」

「ああ、何が起きるんだ…」

最後の力を振り絞つて橋に押し寄せる人。

もう〇時には間に合わないであろう橋から離れた所からは罵声、最後の叫びが聞こえる。

「だいじょぶ…だいじょぶだ…」

携帯の時計はデジタル式の為、23時59分の何秒まで進んでいるかはわからない。

変わら、変わると思いながらも表示されている数字は59分のままだ。

59、59、59、59、00

「あつ…」

プシュー

プシュー

橋の上に煙が立ち込める。

一気に橋方面の視界が悪くなる。

煙に覆われていく中、人が倒れていくのが見えた。

正確にいうと人混みでそれぞれ身動きが取れないため、真下に崩れ落ちていく感じだった。

『ゲームサンクニンズウ、

ヒヤクキュウジュウゴマンヒヤクジュウハチメイ。

マズハ、オメデトウ。

サッソクデスガ、

ゲームセツメイデス。

イマカラ、

ヨンジュウヨンニチ、ヨンジュウヨンパン、ヨンジュウヨンビュウ  
デ、

シコク、ハチジュウハッカショ、

ギャクマワリ、シテクダサイ。

ジカンセイゲンガ、

アリマスノデ、

イソイデクダサイ。

…デハ…』

4月5日

0・15

「橋にいた人はみんな死んでるよ」

毒ガスの霧が少し晴れてくれる、絶望的な光景が目に入ってきた。

目の前に映る橋は命を繋ぐくもの糸だったはず。

その糸に縋り付いてきたものに容赦なく浴びせられた毒ガス。

どれも苦しみながらも、その場から逃げ出すこともできずに一塊となつて死んで行つたのだろう。

「ヒテ、とうあえずおまえを信じて良かつたよ。

ハセガワとイワキ…あいつらのこととは忘れよう」

黙つたまま橋を見つめるおれの肩にアキオが手を掛けた。

「…ああ」

おれはアキオに内心を語られぬよう下を向いた。

『125・077・275／130・000・000』

『参加者1950118名』

周りの人の話によると、橋を渡つて本州へ辿り着いた人も原因不明だが次々と倒れて亡くなっているという。

おそらくそれぞれの橋を渡る際に何らかの毒物が仕掛けられていたのだろう。

故郷の四国を捨て、真っ先に逃げ出したものは死に、とじまつたものが生き延びた。

「アキオ、マジナ!!。おれらの選択は正しかったみたいだよ」

「まあな、あのまま橋渡つてたら死んでたもんな」

「いや、そのことじゃない。今始まつたこのゲームのことだよ。ゲームクリアの条件はなんだっけ?」

おれは下を向いたまま、顔がにやけるのを我慢しながらアキオに聞いた。

「ゲームクリアの条件って、ウッド・ベルが言つてた、『ハ恰恰ヶ所逆回り』のこと?」

「そう、それだよ。まずはゲーム参加メンバーに選抜された。これで第一関門は突破した。

で、この第一関門を突破したやつは今どこにいるのか?

大きく分けて二つのグループに分けられるだろう。

まずは、ウッド・ベルの警告を無視し、四国に残つたもの。

もう一つは四国を出ようと三つの橋に向かつたが間に合わなかつたため、運よく生き残つたもの。

前者は各自自宅付近にいるだらう。そして後者はそれぞれが向かつた橋の近くにいるだらう。

「この中で正しいスタート地点ここにあるのは……」

「あつ、おれらだーおれらだよー四国お遍路八十八ヶ所目はたしか  
こいつのまうだよ。なあそういうだろ?」

「そうハ十八ヶ所目は香川県さぬき市にある大窪寺。

三つの橋の位置で見ると、瀬戸大橋と鳴門大橋がこの大窪寺に近く  
なる。

3分の2の確率だが、今治を選んでなくてよかつたよ。

ゲーム参加人数が195万ってなってたけど、実質すぐに大窪寺に  
動ける人間、広くみても今香川県にいるもののみ正式な参加メンバ  
ーになるんだろうな

「なんか今日のヒゲなんか違うね…」

ふとつぶやいたマツナミの声が聞こえた。

確かにいつもおれと違つのは自分でもわかっている。

だが、抑え切れない程の鼓動が全て自分の力へと変わっているような気がした。

「さて、大窪寺に向かうか」

4月10日 新潟 米問屋事務所

8：00

今日も朝から『ウッズ・ベル』のニュースばかりだ。

寒い冬がやっと去りつかとこゝろ中、身も心も温まるよつな話題はな  
いものか。

会社は売上、売上。

テレビをつければ『ウッズ・ベル』、『ウッズ・ベル』。

『ウッズ・ベル』が登場し、渋谷だけならまだしも、四国が閉鎖さ  
れてしまった関係で会社の売上はつなぎ登りだ。

上司の機嫌もいい。

ただ、休みもなく働かされる現場の身にもなつてもらいたい。

所詮、会社の売上が上がつても現場の給料には反映されないのだから。

今日も一時間仮眠をとつただけ。

日本がこんな状況でも仕事だけは待ってはくれない。

「今日も部長に怒られに行くか

気合いを入れて米を保管している倉庫へと向かつた。

「今日もこれ全部運ぶのか…これだけの量をこの時間で運べってか

「ケイスケはまだいいほうだろ。おれはこれだよ

同僚のスズキが山積みの米にもたれかかって言つた。

「みんなびびつて食料のまとめ買い。せっかくまとめ買いしても『ウッド・ベル』が現れて毒ガスマかれたらい意味ないのにねえ」

スズキはそう言つが、おれも実は四国の件があつた次の日にスーパーでカップ麺やら缶詰やらをまとめ買いしていた。

ブー

ブー

「ん、また緊急速報か

四国でのことがあつてから、何かあると携帯に緊急速報が流れるよ

うになつた。

「そういえば今朝のニュースでやつてたけど、あの日に四国から出た人昨日までみんな死んだらしいね。

ん？大窪寺が全焼…同時に大窪寺に辺り着けなかつたと思われる人達が次々と死亡…だつてよ」

「あれから5日経つのにまだ政府は四国に入れないんだろ？なんかよくわからないバリアのせいでの」

「翌日に助けに向かつた自衛隊が上陸できずに全滅だもんな。おとといは政府の包囲網を抜けて四国に入ろうとしたやつが遺体になつて本州に流れ着いたつて話だしね」

今四国は完全に封鎖されている。

入ろうにも入れないからだ。

四国内での現在の状況は、今『四国編に参加している』メンバーからの携帯での情報のみしかない。

「まあ、それよりはまだ運搬船の荷物を運ぶことにならぬ

4月15日 新潟 ケイスケトラック

8：18

『121・988・226／130・000・000』

あれから10日が経つた。

相変わらずカウンターは下がり続けているが、仕事は忙しい。

今日は一睡もしていない。

朝から米をトラックに運び込み、またいつもルートを走っている。

もつ少しで最初の配達先に着く頃だ。

ため息まじりに携帯を閉じようとすると、砂嵐が現れ、文字が浮かび上がった。

『ノウカノミナサマ、

オハヨウゴザイマス。

キハ、ジュクシマシタ。

ニホンハ、コメニ、ササエラレテ、キマシタ。

イマカラ、ソノコメニ、ホロボサレルノハ、アナタタチデス。

クワレルマエニ、クラエルカ。

… デハ …』

カタツ、カタカタ、カタ

『コメソウドウ』

カタ

『

米  
騷  
動

』

『米』という文字を見たおれは悪寒が走った。

普段見慣れた、日常扱っている『米』という文字を『ウッド・ベル』が使つたことで、身近なところに何かが起こるのでは、という想いがした。

「機は熟したつて…」

と、考える間もなく、配達先に着いた。

「まずは田先の仕事終わらせねえとな」

この配達先は四国の件があるまでは田中に運んでいたが、あれ以降納品量が異様に増えたため、オープン前の朝に納品させてもらつていた。

「すいませ～ん」

搬入口の電気が付き、中で物音がするが鍵を開けてもらえない。

とりあえず荷物を先に降ろしておいつとおれはトランクに戻った。

ガサガサ、ガサ、

ガサガサガサ、ガサ、ガサガサ

「ん？荷台の中から？なんだ？」

荷台の扉に手をかける。

ブー

ブー

緊急速報…？

ハツとしたが、おれの扉を開ける手はもう止められなかった。

黒い塊が開いた扉から一斉に噴き出してきた。

顔面、腹、脚と体全身に襲い掛かる。

半開きになっていた口にその物体が飛び込んできた。

「ゲ、ゲホッ」

吐き出そうとするが、黒い塊の圧力があまりに激しく、身体にまとわり付いていたため、逆に飲み込んでしまった。

トライック内の黒い塊は一時はおれの身体を飲み込んだが、気が付くとおれを中心に四方八方に飛び散つて行つた。

喉に奇妙な感覚を覚えながら、おれはその場にへたりこんだ。

「……なんだつたんだ……あれ……」

ブー

ブー

携帯の緊急速報がなり続けているのにやつと氣付き、携帯の画面を慌てて開いた。

『8・22 ウッド・ベルによる犯行予告と同時に米から大量の謎の虫が発生。この虫が人を襲い、各地で死亡者が出ている』

『8・30 現在手元にある米は容器に入れ密封すること。スーパー他、米を扱っているお店は店を閉め鍵をかけ避難すること』

ブー

ブー

続けざまに緊急速報が入る。

『 8 : 33 』この虫は新潟県産の米のみから発生。 5 kg | 袋分で  
人一人を襲い、食べ尽くした後、その場で死骸となる

トラックの荷台を見ると、限界まで積んでいた米の姿はなく、新潟  
県産こしひかり100%とかかれたビニールの袋だけが残っていた。

ふと納品先の店内が気になつた。

軒先の電気は朝にも関わらずついているが店内は薄暗い。

「おえっ」

近付いて見ると、店内は例の虫が飛び回り、薄暗い雰囲気をかもし出していた。

店の自動ドアにへばりついているものを見ると、なんとも不気味な容姿が判明した。

「キツツコオロギを吐してまで割つたよつたみたこともなつ生き物だ。」

大きさは5㌢ほど。

あの小さな米粒からビリ生まれたのか？

「うげつ、おれこんなもん飲み込んだのか…」

店内の奥の方を見ると理科室にあるよつた骸骨が寝転んでおり、周囲には虫の死骸が転がっている。

「おれもあのままだつたら、いつなつてたのか…そういうえば、スズキは…」

スズキに電話をすると無事だった。

スズキのトラックの荷台にはまだ大量の虫が詰まつたままであり、そんな状態なので、途中でトラックを動かせなくなつているとのことだつた。

そんなに遠い所ではなかつたのでおれは空のトラックでスズキを迎えに行つた。

「ケイスケ、よくトラック一杯分の虫に襲われてだいじょぶだったな」

「まあね、何が起きたかわからなかつたけど、なんか助かつたよ」

「まさか自分がこんなことに遭遇するとは思つてもみなかつたな。新潟県産だけなんだよな、虫が発生したの」

「そうみたいだね。被害はやつぱり新潟中心だけど、全国各地で被害出てるみたいだね」

「まだに緊急速報がなりっぱなしの携帯を見ると、

かなり減つていた。

それだけ新潟のお米が日本人に支持されていたということになるが、逆にそれが悲劇を大きくしてしまったとも言える。

おれとスズキはこの状況で何をどうすればいいかもわからず、とりあえず事務所に戻ることにした。

街中には無数の黒い塊が徘徊していた。

地面には所々黒い塊が落ちている。

その隙間からは白い骨のようなものが覗いていた。

スーパー や ドラッグストア などお米を扱っている所は ほぼ シャッターが降りている。

降りていらない店もあるようだが、よく見てみると、おやじく従業員が全滅しているであることがわかつた。

民家も同じく人の気配がなく、生活の跡だけがそのまま残されている所が多い。

中にはおれらと同じように助かった者もいたが、力無くその場につづくまつていた。

おれは普段は15分で駆け抜ける道を40分かけて事務所へ戻った。

10・50

事務所に着くとワタナベ所長と事務のクサカベさんが外にいた。

「おっ。おまえらよく無事だつたな。詳細はさつき電話で話した通りだ。急にだつたからな…」

事務所と米保管の倉庫はくつついていた。

そんなに大きくない事務所だったが10名が事務所内で犠牲になつた。

ドライバーはあれとスズキ以外はまだ連絡が取れていらないらしい。

「ここの音聞こえるだる。恥ま恥ましい音だよ」

倉庫からはガサガサを通り越して、ゴオーという音が聞こえる。

振動で倉庫が破壊されそつた程の轟音だつた。

「所長、ケイスケのやつ一旦あの虫に襲われたのに生きてたんすよ。トライックに積んでたやつ全部に襲われたのに無事だったんすよ。ホントに奇跡ですよ、奇跡」

「あいつもか。いや、事務のクサカベさんも一回は取り囮まれたのに喰われずに済んだんだよ。隣のササキくんはあつという間に喰われてしまったんだがね」

「へえ、意外に助かってる人もいるんですね。所長はビリやつて助かつたんすか？」

スズキがワタナベ所長の機嫌を取りながら話している脇でクサカベさんがおれに耳打ちしてきた。

「所長…みんなを盾にしたんです。あの虫が迫ってきた時に、ササキさんもあたしも逃げようとしたんですけど、あたし達、所長に掘まれて、虫が来るほうに蹴飛ばされたんです。

あたしは運よく無事だったんですけど、ササキさんは横での虫こ…」

所長りしこと言へば所長りしこ。

普段から威張り散らし、機嫌が悪くなるとすぐに部下にあたる最悪な上司だった。

おれはあまり「機嫌取りがつまらないせいでこつも、イライラをぶつける矛先にされていた。

その点、スズキはつまくやつである。

多少は怒られることがあるが、所長からはかなり気に入られている。

スズキは一緒に酒を飲む度に社会でつまくやつでいく重要性を毎回毎回耳にタコができるほど説いてくる。

「所長が死ねばよかつたのに…」

クサカベさんが最後に発した言葉に少し恐怖を感じた。

4月16日 ケイスケ宅

8:00

久々に12時間寝た。

「一週間、働きっぱなしだったため、体は相当疲れていた。

本来はもう米の配送という仕事はないため、もっと寝れるはずだったが、所長から事務所周りの片付けに来いとの指令が入ったため、事務所へ行くこととなつた。

布団をたたみながら、職がなくなるであろうことと会所の隅においてある米びつのことを考えるとため息しか出でこなかつた。

「これから、日本はどうなるんだる…自分はどうなるんだる…

…

……自分とクサカベさんはなんで助かったんだろ……」

事務所に着くと昨日のメンバーに加え、おれらと同じドライバーの三シノがいた。

ヨシノはドライバーの中では一匹狼的な存在で誰ともつるまない。

所長といいヨシノといい、人間的にどうつかと思いつやつぱかり助かっていてなんだかあまり気分はよくない。

「さあ、掃除始める~」

いつものようにここには命令するだけで一切自分ではやむひとつしない。

「もうちよつとスーパー上がるだ。なんとか今日中には綺麗にしてくれよ」

結局、倉庫周りと事務所周りの虫と白骨を片付けるのに丸一日かかった。

この間に、この虫に対する対処法が見つかった。

それは『水』だった。

人間の約60%は水分であり、この虫はその水分が体の中に、ある一定量たまると動けなくなり死ぬとのことだ。

そしてこの虫は『人喰い虫』と名付けられていた。

「おい、みんな集まれ」

二日目の解散時、所長がとんでもないことを口にした。

「事務所には大事な書類がある。取引先にも早く連絡しなきゃなん。人喰い虫が水で退治できることもわかつたことだし、事務所に入つて必要な物を取つてくるとしようか」

おれは最初反対したが、書類さえ手に入れば給料を払えるとの言葉に流され、事務所への突入を決心した。

4月18日

13：00

「突入の際の確認だ。よく聞くだけよ。まず今回の目的は事務所内の重要書類を手に入れることだ。

ただ、現状は窓から見えるように中は人喰い虫が充満している。事務所と倉庫をつなぐドアが開いているからだ。

まず、事務所内のやつをやつつけ、そのドアさえ閉められれば、もう事務所内に人喰い虫が入ってくることはない。

いいか、わかつたか？じゃあ、担当を発表する。まずは…先頭はおまえだ」

所長の指先はまっすぐおれを指していた。

「えつ？おれですか？」

「そうだ。ここにホースが2本ある。このホースで水をまきながら中に入るんだ。一番手はヨシノ、おまえが行け。

スズキとクサカベさんは事務所の入口のドアを開ける係だ。万が一外に入喰い虫が出てくるようななら入口に用意してあるバケツの水を使ってくれ。

最後におれはここで蛇口の開け閉めをやる

「えつ、所長は中に入んないんですか？」

「当たり前だろ。ホースは2本しかないんだ。だいたいおれがいなきゃ指揮するやつがないだろ」

確実にハズレくじを引かされた感じだ。

やはり所長はくそだ。

しかし、だれかがやらぬといけないことなので諦めて自分がやることにした。

一旦襲われたのに大丈夫だつたこともあるので、それを含め意外と緊張感は湧いてこなかつた。

13:59

「さあ、準備はいいか？14時になつたら作戦開始だぞ。

⋮

⋮

さあ、カウントダウンだ。10、9、8、7、6、5、4、3、2、  
1、ゼロ。ドア開ける！！

合図とともに事務所の入口のドアが開けられた。

中にいた人喰い虫は、今までなかつた所に急に空間が現れたため、一瞬動きが固まつたが、一斉に新しく開いた空間へ進もうとした。

そこへすかさず、おれとヨシノがホースで大量に放水を始める。

情報通り、水を浴びた人喰い虫はバタバタと床に落ちていった。

おれはおれの生活を田茶苦茶された恨みを晴らすべく、飛び回つているやつにも、もう力尽きて床に這いつぶまつてこらやつにも容赦なく水を浴びせた。

ほぼ入口付近を制圧したと思つたとたん、急にヨシノが事務所に飛び込んだ。

「ばか、まだ中にはこいつぱこいのんだぞ。へやつー。」

ヨシノの単独行動におれも突入しなければならぬ雰囲気になった。

多少恐怖はあるが体は動くよつだ。

「いづおおおー」

おれは叫びながら事務所に突っ込んで行つた。

事務所内は真っ黒の塊で覆われていた。

足元は退治した人喰い虫の死骸が山になつており前に足を進める度に膝下まで埋まる。

もちろん靴の中もいやな感触であふれかえる。

目的は事務所と倉庫をつなぐドアを閉めることだ。

先に突入したヨシノの後を必死で追い掛ける。

ヨシノに襲い掛かる人喰い虫に必死で水を浴びせる。

ヨシノの単独行動があつたものの事務所の半分くらいの所までは順調に来ている。

「ヨシノー！ もう少しだ！ がんば… おい、なんだよ、これ… 水が…」

来た道を振り返ると人喰い虫の屍の山に向ひつに所長が慌てふため

く姿が見える。

所長の足元にはホースの端が転がっている。

「くそーあのカスがーヨシノー引き上げ…」

ヨシノにもう水が出ないとこを伝えようとした瞬間、急に前からヨシノが現れ、突き飛ばされた。

おれは人喰い虫の山に倒れ込みながら叫んだ。

「くそー..どいつもこいつもくそやろブブブ」

最後の言葉は襲ってきた人喰い虫に覆われ、言葉にならなかつた。

一度体験した黒い塊の圧力に懐かしさすら感じるほど、体に力が入らない。

さすがに今回はだめか。

でも、いつか。

おれのために泣いてくれる人もいないし…

クサカベさん…

黒い塊の圧力はどんどん増していく。

喰われて死ぬのが先か、それとも押し潰されて死ぬのが先か。

どうせ喰われるなら死んでからのほうが苦痛が少ないのかな。

いろいろな事を考えているうちに不思議と体の神経が全てなくなり、唯一動く脳みそだけが自分になつていく気がした。

死ぬ時はこうやって死ぬのかあ、意外と楽に死ねるんだなあ、と安らかな気持ちになって行くおれの脳みそに誰かの声が侵入してきた。

「おい、大丈夫か！」

その言葉を脳みそではなく、耳でキャッチした瞬間、おれの神経は脳みそからそれぞれの故郷へ戻つて行つた。

おれ本来の体に戻つたおれは全身がびしょ濡れになつてゐることに気付いた。

「おい、大丈夫か？ 大丈夫なら、手伝え。おれ一人じゃ限界がある」

そう淡々と話す声は、ヨシノだった。

ヨシノの手にはポットややかんが握られており、それで水をぱらまいていた。

「給湯室の水道を使え。水は出しつぱなしにしてある。コップや皿しかないが自分で考えてどうにかしろ。おれ一人じゃ全部は無理だ」

ヨシノはおれの上に覆いかぶさつた屍を足で振り払い、給湯室に水を確保しに戻つて行つた。

「また生き残つた……」

しかし、そんなことを思つのもつかの間。

黒い塊が襲つてくる。

おれは給湯室へと必死で向かつた。

給湯室の入口でヨシノとすれ違つ。

おれは給湯室にある水が入るものに手当たり次第水を入れた。

給湯室の外で水を使い果たしたヨシノが給湯室に戻つてくる。

ヨシノはおれが水を入れた容器を持つてまた給湯室の外に飛び出して行く。

そんなことを数回繰り返しているうちに、おれは流しから水を溢れかわることを思い付き、流しの排水溝を塞いだ。

しばらくすると水は流しから溢れ出し、給湯室の外へ流れて行つた。

ただこれだけでは飛んでいるやつはいたかられないし、やつが  
けてもやつづけても倉庫から事務所へとやつはなだれ込んでくる。

やはりあの倉庫と事務所をつなぐドアを閉めるしかない。

おれは所長が水道から外したホースをたぐりよせ、事務所と給湯室  
を行き来しているヨシノに叫んだ。

「ヨシノ! やりながらいいから聞いてくれー! のまほじや、らち  
があかない。おれが一気に倉庫のドアまで突っ込むから、ホースで  
支援してくれ」

「わかった

ヨシノからはいつもと変わらず無愛想な応えが返ってきた。

人喰い虫は水に弱い。

おれは少しの足しにでもなればと、頭から水をかぶつた。

そして手に持てるだけの容器を準備し、作戦開始のタイミングを伺つた。

「行くぞ！」

おれはホースを水道に差し込み、ヨシノと共に水の入った容器を持って給湯室を出た。

今まではヨシノ一人だったが、今回はおれが加勢したことにより、人喰い虫はいつもよりやや後退した。

おれとヨシノは給湯室に駆け戻り、おれは突入用に準備していた容器を手に持ち、ヨシノはホースを手にし、給湯室を飛び出した。

「つおおおー」

おれは肝心な所にくるとこの叫び声になるんだな、と今さらながら気付いた。

また生きて、この「うおおおー」を言えればいいなとこいつ思いと、「クサカべさん…」といつ文字が頭の中に浮かんだ。

人喰い虫は先程のおれとヨシノのダブルアタックからまだ態勢を立て直せていなかつた。

おれはヨシノの放水の援護をもらいながら黒い塊へと突っ込んで行つた。

人喰い虫が体に絡み付いてくるが、頭から水をかぶつたのが効いているせいか、力無く剥がれ落ちて行く。

この手持ちの容器は最終兵器だから最後のドアノブにたどり着くまでは使えない。

が、最初に比べ突進する速度は下がつてている。

まだドアノブは見えない。

おれはどういってもつのか。

まだこの切り札を使ってはならない。

いろいろな葛藤の中、限界を迎えた。

「くそっ！もう使はしかねえか！くそっ！」

ドアノブが見える前には使いたくなかったが、左手に持っている容器の水を前方に浴びせ掛けた。

しかし、ドアノブは現れなかつた。

「くそっ！残り一個。こいつでうまく行かなかつたら最後だ。くそつ！」

最後の力を振り絞り、右手をふりぬいた。

飛び散つた水を避けるように、人喰い虫が隊列を崩した。

そしてその隙間から銀色に光るドアノブが顔をのぞかした。

目の前にある塊が人喰い虫だかドアだかわからなかつたが、おもいつきり蹴飛ばした。

ガチャン！

塊は1メートルほど前に吹き飛び、ドアが閉まる音がした。

ドアについていた人喰い虫はドアが閉まつた衝撃で一旦は下に落ちかけたが、態勢を立て直し一斉におれに向かって飛んできた。

「ヨシノ。これで最後だ」

「わかった。」

相変わらずのトーンで後ろからおれの頭上を越して、放水がされた。

今まで倒しても倒しても倉庫から事務所内に流れ込んでいたが、ドアを閉めたおかげであつという間に人喰い虫を駆逐できた。

ほんの5分程前までは真っ暗に思えていた事務所内は蛍光灯の明かりで隅々まで照らされるようになつた。

ただ、いつもと違うのは足元に積み重なつたこの死骸の山と事務所と倉庫をつなぐガラス窓から見える倉庫内の景色だ。

「これだけ殺しても、まだ中にこんだけいるのか…」

倉庫内の人喰い虫は、おれらが事務所に突入したことにより、パックになつてゐるようだ。

ガラス窓がメキメキと軋む音と建物がギシギシと唸る音がする。

「けつ、事務所が汚い虫だらけになつちまつたな。まあ、おまえらよくやつたよ。あー、きたねえ。後でこの『ハリ』の山処理しつけてくれよ」

足の踏み場もない事務所の中に足を踏み入れながら、ワタナベ所長が言った。

「所長、ちょっと聞きたいんですけど、なんでホース抜いたんですか？あれば抜けたんじゃなくて、あんたが抜いてましたよね？」

「あ？あれか。しあうがないだろ、おまえらがちゃんと処理していかないから、何匹かあの虫が外に出てきたんだよ」

「何匹か？おれとヨシノはこの中で何万もの人喰い虫と闘つてたんだよ！それをたった数匹出てきただけでホース抜いた？」

「あんたおれらの」と何も考へてないんだ。ふざけんなよー。」

「おまえいつからおれにそんな口を利くようになつたんだ？いやなら辞めてもうつて結構。もつおまえには払う給料はない」

「そういうことだ、おまえみたいな出来損ないはこのガラスの向こうにいる虫に喰われちまえばいいってことだよ。ね、所長」

スズキが急に割り込んできた。

「そういうことだ。スズキにはこれからおれの右腕となつてやってもらひや。」

おまえみたいな使えないやつはいらぬんだよ。よし、こいつに払う給料がなくなつた分、おまえの給料を上げてやるわ」「いやあ、光榮つす。所長、ありがたいお言葉頂戴致します

そういえば、突入作戦の時、スズキは安全な後方部隊を任せていた。

「スズキ…おまえ、裏切つたな…」

「裏切った？ 聞き捨ての悪いこというなよ。貧乏人のおまえなんか元々なんとも思っちゃいないよ。世の中喰うか喰われるかだよ。

ヨシノとクサカベさんはどうする？ はは、喰つか喰われるかつて、クサカベさんはもつ喰つてたが、この虫」

喰うか喰われるか…

どこかで聞いたような…

「あつ……」

『ウツド・ベル』の犯行予告だ。

『イマカラ、ソノコメニ、ホロボサレルノハ、アナタタチデス。

クワレルマニ、クラヘルカ』

『喰うか喰われるかではない。』

『喰われる前に喰らえるか』だ。

もしかしたら…

ある一つの仮説が頭の中で組み立てられた。

パキ、パキパキ、パキ…

何の音を振り向かなくともだいたいわかった。

「逃げろっーー！」

普段一切大声を出すことのないヨシノが地割れがおこりそつな程の声で叫んだ。

全員が事務所の入口に体を向けた途端、ガラス窓が吹き飛んだ。

入口に近いのは、クサカベさん、スズキ、おれ。遠くにいるのは所長、ヨシノ。

真っ先に逃げ出したスズキは、あわてことか前にいるクサカベさんの肩に手をかけ弾き飛ばした。

「スズキ！ めえ！」

おれはクサカベさんを助け起しそうとした。

所長がその横を通り過ぎたと同時に、振り向かぬ間におれを蹴り飛ばした。

「くそつーてめえら、やつぱりそりこいつ人種かー。ちきしじゅー。」

倒れたおれの腕の中にはクサカベさんがいる。

ガラス窓から人喰い虫が噴き出している。

おれはどうすれば…

すると、所長の後ろから現れたヨシノが所長の腕を掴んでガラス窓のほうへ投げ捨てた。

そして一瞬の間におれとクサカベさんの腕を掴み、引っ張り上げた。

「急げ。」

先程の地鳴りがするような声ではなくいつも無愛想な声でヨシノが言った。

ちらりと視野に入った所長はすでに、ほぼ全身が黒い塊に飲み込ま

れていた。

おれとヨシノがクサカベさんを引いて入口へと足場の悪い道を通り進んで行く。

あと少し、あと少しこうじながら、ヨシノが尻の山に足を取られ転倒した。

おれとクサカベさんが止まって振り返る間もなく、ヨシノの声が聞こえた。

「行け。」

こんな時も無愛想かよ！

おれは心の中で思った。

ヨシノが言うように、今立ち止まつたら、確実に三人とも黒い塊に飲み込まれる。

クサカベさんは止まつましたが、おれはクサカベさんの腕を引っ張り、入口へと向かっていた。

「ダイちやんつー。」

クサカベさんの発した言葉に一瞬おれはダメージを受けた。

しかしおれはすぐこの言葉の意味を理解できた。

おれが今やれる」と、やりたい」とは、クサカベさんを泣かせない」と。

そのためにはクサカベさんを無事に脱出させ、ヨシノを助ける」と。

おれはクサカベさんを入口の外に突き飛ばし、すぐにドアを閉め、襲い掛かってくる人喰い虫の中に飛び込んだ。

黒い塊の力は強く、思つたように前に進めない。

ヨシノまでたつたの5メートル程なのに足がなかなか前に出ない。

おれは大丈夫、大丈夫といい聞かせ、力を振り絞る。

気が付くと無意識のうちにまた叫んでいた。

「うおおおー」

かつてないほどの叫びに、目の前の黒い塊がバラけた。

その隙にヨシノと思われる黒い物体に飛び付いた。

塊の隙間からヨシノが見えた。

まだ間に合つ。

九割九分は確信を得ていたが一分は賭けでもあつた。

「ヨシノ！なんでもいいから飲み込めー早く飲め、飲み込めよ！」

ウッド・ベルが言ったように、こいつらに喰われる前に喰えば、助かるんだよー！いいから喰えよークサカベさんが待ってるんだろー！」

おれはヨシノまでギリギリ届く右手でヨシノの口に人喰い虫を無理矢理に押し込み、口を押さえ込んだ。

数秒前まで見えていたヨシノの顔はもう見えない。

おれもヨシノも人喰い虫に完全に覆われた。

もう窓から差し込む太陽の光も事務所の蛍光灯の光も届かない漆黒の世界へとなっていた。

「うおおおー」

おれは手の感覚だけを頼りにヨシノの顔が潰れるくらい口を押さえ込んだ。

4月13日 北海道 網走刑務所

18：08

なんでおれはこんなとこにいんだよ…

なんもやってないのに…

それにしておれがあの防犯カメラに映つてたんだ…

あいつはなんであんな証言したんだ…

たしかにカメラにおれ?が映つていた。

証言したあいつが嘘をついているようにも見えなかつた。

「おい、ミドリカワ、着いたぞ。今日から死ぬまでここだから、覚悟しちけよ。わっはっはっは」

人をおもいつきり見下した態度を取る看守だ。

おそらく受刑者がいない世界にいれば、周りから気持ち悪がられるタイプだろう。

それよりも、これから先、もしかしたら一生を過ごすことになるかも知れない、この目の前の要塞をどうするかを考えなければならない。

おそらく、あれだけの証拠があれば再審は無理だろ？

誰の目から見てもおれがやつたよつてしか見えない。

しかし、おれは何もやっていない。

人を刺すなんてことは絶対にしない。

普段は血を見るだけで、頭が痛くなる。

そもそも、被害者はおれが愛していたものなのだから。

そつとは言つても、この現状は変わらない。

このまま無実の罪を被せられたまま、こんなところで死ぬわけにはいかない。

なんとかしてここを抜け出し、自分で調べるしかない…

そして、必ず見つけだし復讐しなければ…

(2年前)

8月15日 新潟

23:35

「お~い、H!!P~, なんかあったか~」

おれは今朝からメールの返信もなく、電話も繋がらないH!!コが心配になり、H!!Pのマンションにやってきた。

ドンドン

「お~い

ふとドアノブに手をかけると鍵が開いていた。

あれ?

中でいるのか？

「HIIII～、入るよ～」

ドアを開けると、筋が凍るような冷気が顔の脇を抜けて行った。

特に靈感は持ち合わせていないが、空気だけではばこになつてゐることがわかつた。

「HIIII～～HIIII～、HIIII～～～。」

凍り付くような冷氣はH/Mが発していたのだ。ひつ。

リビングのドアは開いており、白の絨毯と真っ白でくすみのない純白な肌をした脚が見える。

近づくにつれその透明感のある脚からも、腰が見えてきた。

座っているのではない。

仰向けに倒れている。

そりて恐る恐るドアに近づきリビングを覗き込んでみると、今までの純白の景色が一転、真っ赤に染まつた世界が広がつていた。

赤い世界を作つてゐるであつて中心地には、この世界の根源となるものが存在した。

見覚えのある形のその凶器は、以前とは違つ真っ赤な色をしていた。

おれは玄関のドアを開けた時から、なんとなくこれに近いイメージが出来上がっていたため、実写を見ても動搖せずにすぐに1110番できた。

4月15日 北海道 網走刑務所

8・30

「あああ——」

鉄格子の向こうを看守が走り抜けた。

何かに追われているようだ、と思つた途端、今度は黒い塊が鉄格子の前を通過した。

「あああ——ああ……」

「おーおー、なんだよ、あれ」

黒い塊に飲み込まれた看守の声はもう聞こえない。

よく見ると黒い塊は小さな虫の集まりだった。

「看守さーん、大丈夫ですかー？」

しばらく待つても返事はなかつた。

代わりに黒い塊の一部がくずれ落ちた隙間から、頭蓋骨が現れた。

「うわあ。…喰われた…のか?」

何が起こっているのか全くわからないおれだったが、刑務所に入れられている身としてはどうすることもできなかつた。

そして、半日、あの頭蓋骨になつてしまつた看守以外の看守は鉄格子の前に現れなかつた。

変化があつたのは夕方のことだつた。

「お～い、こっちに残り一人いるぞ。全滅だなこりや。」

「でもまあ、看守でよかつたよ。これが囚人だつたら、世間から何を言われるかわかつたもんじやない。」

声だけしか聞こえないが、おそらくここに関係する者だらつ。

あいつらは何か知つているのか？

「すいませ～ん。何かあつたんですかー？」

「……」

確實に聞こえているはずなのだが返事はなかつた。

(2年前)

8月17日 新潟

9:30

ドンドンドン

おれは玄関を叩く音で起きた。

昨日は一日警察と一緒にいたため、異様に疲れた。

せっかくその疲れを取るために熟睡していたのに、それを邪魔された挙げ句、最悪な未来へと引っ張られて行つた。

「おまえだろ?」

取調室に入ると一言だけで聞かれた。

「は？」

「おまえだろ？お・ま・え・が・やつ・た・ん・だ・ろ？」

ムカつく喋り方だ。

それはいいとして、おれには何がなんだかわからなかつた。

いきなり任意同行を求められ、警察に連れて来られ、訳のわからぬ  
い質問をされている。

「なあ、彼女とけんかしてつこやちやつたんだろ? 殺した後、怖くなつて自分で通報した。そつだら?」

「はあ? 何言つてんですか? おれがH//Mを殺したってんですか? ふざけるのもいい加減にしてトセコ」

といいつつ、警察はふざけてなんかいないといつことはわかつていた。

どんな些細な動きも見逃さない、そんな刑事の目でおれを見ていることは百も承知だった。

おれはなぜおれに容疑がかかっているのかを冷静に聞き出かうとした。

「おまえ、通報する前にも彼女の家行つたんだり? 彼女を殺しに」

「何言つてんですか、おれはあの日朝からH//Mと連絡が取れないんで、様子を見に行つただけですよ。そしたら、H//Mがあんなことになつて……」

「じゃあ、確認するが、おまえが彼女の家に行つたのは、その一回だけなんだな？じゃあ、マンションの防犯カメラにおまえが一回映つていたとしたらどう説明するんだ？」

「えつ？」

「おまえが通報する3時間前、おまえが被害者モに行つたのが防犯カメラに映つているんだよ」

そんなはずはない。

おれは朝起きてから夜H/Mのマンションに行くまで一日家でゴロゴロしていた。

「おれは今日一日…」

ガチャ

取調室に入ってきた男が目の前の男に何やら耳打ちをした。

「ふふ、ミドリカワ、長い一日になりそうだな」

4月17日 北海道 網走刑務所

4・50

「あー、腹減つたー！なんか持つて来いよー」のままじゃ、死んじまうぞ！」

隣にいる囚人がどうにもならない中、喚きあらしている。

たしかにもう腹が減つてどうしようもない。

看守が変な虫に襲われた日以来、だれもここに入っこない。

「これがここの中口なんだろ？」

また隣の囚人が怒鳴り始めた。

「散々おれらを弱らせて、連れてくんんだる。おれは知つてんぞ。昔ここに収容されて大量に死んで行った奴らを。

でも、奴らは死んじやいない。死んだことになつてゐるが連れてかれただけだ！おれらも連れてくんだろ？」『地下帝国』に…

## 地下帝国？

おれは馬鹿馬鹿しいと思ひながら、そんな妄想から生まれた言葉が頭の片隅に焼き付いた。

完全に外界から放置されているこの檻の中にいるところとは、誰かの助けがないと生きていけない。

あんなくそ看守でもいてくれないとおれは生きていけないのだ。

網走刑務所は、1890年にその歴史が始まった。

当時はエアコンなんていう便利な代物はなく、北海道という土地柄から冬は相当劣悪な環境だったといふ。

囚人達は、過酷な環境の下、道路整備などの肉体労働を課せられ、多くの囚人が命を落とした。

また、脱獄王と呼ばれる人物が出てくるなど、刑務所の代名詞となつていったのがこの網走刑務所だ。

普通に考えれば、地下帝国なんものは存在しないと切り捨てるだる。

しかし、田の前で起きた出来事と無実であるはずの自分がここに連れられてきていることから、何か違和感を感じた。

とはいっても解決すべきことはおれの事件だ。

おれの無実を証明するために、打ち破らないとならしい閑門が二三つ

ある。

一つ目が、防犯カメラに一度おれが映っていること。

二つ目が、凶器に残されていたおれの指紋。

三つ目が、犯行時間帯にH/M/Pの家に入つて行くのを見たといふ、  
おれの友達のカオルの目撃証言。

特に問題なのが、防犯カメラの件とカオルの目撃証言だ。

Hの二つを説明しない限り、おれの無実が証明されないだろう。

おれはあの日、たしかに一回しかH/M/Pのマンションには行つてい  
い。

それが、一回行ったことになつてゐる。

防犯カメラも調べなくてはならないが、カオルがなぜそんな証言を  
したのか直接話を聞かないとにはどうしようもない。

もしかしたら、カオルが犯人なのか？

おれは必ず犯人を見つけ出し、復讐することを再度胸に誓つた。

その為にもここを出なくては…

4月1・8日 北海道 網走刑務所

17：00

ガチャン

刑務所内で空腹に耐えていたおれの耳に大きな音が響いた。

ふと顔を上げると鍵が開いていた。

看守が来て開けたのか…

気配はなかつたはず…

いや、空腹のため気付かなかつたのか？

恐る恐る廊下に顔を出してみると、他の囚人達も同じように顔だけを出し、辺りを不思議そうに見回していた。

やはり、看守の姿は見当たらない。

一人の囚人が忍び足で抜け出すと、すぐさま引き返してきた。

「なんかわからんねえけど、『ウッド・ベル』ってやつがここを解放  
したらしい！おれらは自由だ！自由だ！自由だー！」

それを聞いた囚人達は目の色を変えて、今まで暮らしてきた飾り気  
のない静寂に包まれた部屋を飛び出して行つた。

おれも流れに身を任せ、自由になることを選んだ。

人々、自由といつ言葉を発しながらこの監獄の外を目指したが、それに呼応するかのように、刑務所内に、

-復讐、復讐、復讐、復讐 -

といつ不気味な低い声が響き渡った。

頭の中を搔き回す音源が妙におれの鼓動を速めた。

囚人達と刑務所から逃げ出すために廊下を走っていると、ふと事務所のドアの隙間からテレビが目に入った。

他の囚人達はそんなことには目もくれず、外界を目指している。

おれは今何が起こっているのかを少しでも理解するため、また真っ赤に染まっている画面がなんなのかを確認するため、外に向かう囚人達の列に逆らい事務所へ入った。

「これは…」

『ホツカイドウノミナサン、オハヨウガザイマス。

ムカシカラ、カイタクノチトシテ、タクサンノ、ヒトビトガ、イノチヲ、オトシテキマシタ。

ホツカイドウハ、ソノギセイノウエニ、ナリタツテ、イルノデス。

ソノレキシヲ、フマエタウエデ、ホツカイドウハ、ダレノモノカ。

……『

『網走編』

「網走編？そつか、あの渋谷、四国とテロ？を起こしたやつの仕業か」

おれは自分が刑務所に入れられる少し前から発生している、頭のおかしい事件の一つに巻き込まれたことを認識した。

「まあ、しょうがない。これを利用して真犯人を探せつてことか」

おれは事務所の机の上に放置してある、充電中の携帯を充電器」と引き抜き、服の中に突っ込んだ。

数日振りだったが、外に出て感じる世界はとても新鮮だった。

壙に囲まれていない自由な世界は心を豊かにするところが実感できた。

しかし、その気持ちの一瞬で崩れた。

道を進めど進めど悪の世界しか広がっていなかつた。

普段は平和に過ぐしていただろう外界は壙の中の住民により、破壊活動、略奪行為が行われていた。

「ここから、出た途端にこれかよ……」

たしかに元々を出てみたのはいいものの、何も持っていない。

何をするにも金が必要というのはわかる。

しかし、LJの有様はあまりにもひどかった。

「所詮犯罪者か…」

この醜い光景を前に立ち尽くしていると後ろから肩を叩かれた。

「きみはどうするつもりかな？」

びくつとして後ろを振り向くと、同じように囚人服を着た50歳前  
くらいの男が立っていた。

「自分が生きるためにはどうするか? 人間として生きるためにはどうあるか?」

「きみは自分が生きるために行動してるのかな? 人間として生きるために行動してるのかな?」

「は?」

「簡単! 言ひ。 もみじ田の前で起きてここにひとを疋と見るか畠と見るか」

「いや、まあ、いいとは思いませんが……」

「よし、では一緒にひ。 つこて来なさい」

いきなり腕を引っ張られた。

「な、なこすんですか!」

男はおれの発した声にすぐに反応し、掴んだ腕の力を緩めた。

「あ、失礼。わたくし、ハマナカと申します」

「いや、わうじやなくて、急に何をするんですかって意味ですよ」

「何をするか…ですか…逆に聞くが、きみは何をするつもりなのかな?」

「は?なんなんですかあなたは…」

「刑務所を抜け出し何をするのか?明確でないならここに残つたほうがいい」

なんだかよくわからなかつたが、相手のペースに巻き込まれ、おれはおれの事情をこのハマナカという男に話した。

「そつか。きみもいろいろなことを抱えて生きているのだなよし、わかつた。協力しよう」

気が付くとハマナカという男と並んで歩き始めていた。

この男、不思議と吸い込まれていくような雰囲気を持っていた。

「おーー・シノハラー・てめえー。」

急に建物の影から、男が飛び出してきた。

男は頭と右腕から血を流し、囚人服はズス黒く染まっていた。

この男の殺氣がおれら一人のどちらかに向けられていくことは容易にわかった。

しかし、おれはシノハラではない。

「おー、兄ちやん・騙されんなよー。」

これは確實におれに対してもう二度と言いつぶさる。

「おれはこいつに嵌められたんだ。おれを囮にして、金を持ち逃げしゃがって。おかげでこの様だ、くそ」

「ちひ、余計などこに出できやがって」

「えつ？」

完全にこのハマナカという男を信用してしまっていたせいで、理解するのに少し時間がかかった。

考えてみれば、刑務所に入っていることは、何か悪いことをしたということだ。

結局、ハマナカと名乗る男はこの血まみれの男に致命傷を『え、男はその場で死んだ。

おれは我に返った時点で全力で逃げたため、なんとか助かることができた。

冷静さを取り戻したおれは、この状況を甘く見ていたことに気付いた。

おれは無実でここに入れられていたが、ここは悪の巣窟である。

それが今全て解放されたとなると、この惨劇は必然とついたのだ。

現実を見て、現実を正しく認識する。

そして、誰も信じない。

これらを肝に命じておく必要がある。

おれにはおれの無実を証明するといつやらなければならぬことがある。

それをいかに実行するかを考えなければならない。

今手にしているのは、事務所から奪つてきた携帯だけ。

他には何も持っていない。

この状況から、なんとか新潟まで戻って、カオルに会わなくてはならない。

ブー

ブー

携帯が服の中で震えた。

『17：32 人喰い虫に対しての確実な対応策が判明。人喰い虫を食べた者は人喰い虫には襲われない。今すぐに人喰い虫を食べること』

4月に入り、『ウッド・ベル』というものが渋谷、四国を混乱させていることは知っていた。

携帯に緊急速報が入るようになつたのも聞いていた。

しかし、自分が刑務所に入つていたこの短期間の間に、故郷である新潟を中心に全国で被害が出ていたのは知らなかつた。

あの看守が虫にやられていたのはこのせいだったのか、というのがやつとわかつた。

『99・655・380／130・000・000』

この数字が日本国民を表していることは知っている。

一目見ただけでわかつてはいたが分子の桁が変わっていた。

ブー

ブー

続けざまに緊急速報が流れた。

『17・35 ウッド・ベルの犯行声明は北海道、網走刑務所の解放と判明。無数の犯罪者が町を襲いつつ勢力を拡大している』

犯罪者という言葉の中に自分が含まれていると思うと、なんとしても自分の無実を証明しなければと思った。

網走からなんとかして新潟を目指す。

そのためこまづは札幌を田舎すこととした。

同じ北海道といつ土地だが、距離はものすごく離れている。

「とりあえず移動手段が問題か…」

辺りを見回すと、すでに囚人達が車を奪い、暴走を始めていた。

手には、たった今収穫した包丁やナイフが光っている。

おれは囚人達の標的にされた家を覗いてみた。

ガラスは割れ、家具はひっくり返り、人が物のように投げ捨てられていた。

おれは何件か回り、必要な物を揃えた。

護身用の武器、食べ物、金、そして運のいいことに車のキーも見つけた。

車が手に入り、荷物を全て車へ乗せた。

準備はできだが、唯一、囚人服だけがなぜか脱げない構造となつており、そのままになってしまった。

4月18日 北海道 国道

22：15

網走刑務所を解放されてから5時間が経つた。

国道を走っているが、北海道という広大な地のせいか、網走での混乱が嘘のように落ち着いている。

道は一直線に伸びても続いている。

明かりがなく暗くて周りはよく見えないが自然豊かな景色が広がっているのだろう。

刑務所から逃げた時より、幾分か気分は落ち着いている。

おれは今後のことを考えながら、たまに走っている前の車を120kmくらいの速度で、対向車に気をつけながら抜いて行った。

ウーハー

少し離れた所でパトカーのサイレンの音がする。

バックミラーを見るとヘッドライトがチラチラと映っていた。

おれは100km/hで走っていたがヘッドライトはぐんぐん迫ってくる。

ヘッドライトが近付いてくるにつれ、その後ろに赤いランプを煌々とさせながら走っている車が確認できた。

「やべ…」

おれはアクセルを踏み込み加速したが、一瞬の判断の遅れにより、後続車に追いつかれてしまった。

「貴様ら無駄な抵抗をやめて今すぐ止まれー！」

一台のパートカーからは、順次スピーカーでの説得がなされていた。

追われている車は二台。

今、おれの車も加わったため、計四台となる。

「バカヤロー！おれを巻き込むなよ！」

そう叫んだが、180kmの猛スピードの中、カーチェイスが始まつた。

ゾワッ

車が多少でもアップダウンのある所を通過すると身体が浮き上がる。

カーブに差し掛かれば、身体が外に持つていかれる程のGがかかる。

ハンドルを握る手には力が入り、どんな圧力にも耐えられるよう、身体を前のめりにして、前方とバックミラー、サイドミラーを順番に目だけで追う。

「あー、つぜえ。こんな一本道が続いたら脇道にも入れねえじゃ  
ねえか！」

ド、ゴンツ、ドガツ！

後ろのやつが車をぶつけてきた。

おれが道を譲らないこと、ライライしてきただろう。

しかし、おれはおれで警察に見つかれば捕まる身だ。

この今着ている囚人服を見れば誰が脱走犯かは一目瞭然だろう。

「ぶつかってくんないよ、バカヤロー！」

その度に鞭打ち症になりそんなくらいの衝撃が車を襲うが、おれはハンドルをさらに強く握りしめ、さらに強くアクセルを踏んだ。

前を走っている一般車両を見つけても、あつという間に追い越し車線から抜いて行く。

「逃げられると思つてゐるのか！」

「止まれー！」

パトカーの停止命令を無視し、後続車はおれの車の横に滑り込もうとする。

「やせらるかよー！」

おれはハンドルを切つてそれを阻止する。

バックミラーを見ると、後ろの車とパトカーもかなり激しくやりあつてゐる。

「いい加減に止まれー！これ以上逃走するなら撃つぞーーいいから止ま  
れー！」

囚人達の車は止まるどころか蛇行しパトカーを挑発する。

パンツ、パンツ

ギュルギュル

バックミラーの中のヘッドライトの動きから、車一台がコントロールを失つたのがわかつた。

ズゴゴゴ、ドゴーッン

確実に脇の看板に突つ込み、大破したような音が聞こえた。

「まじかよ。ホントに撃ちやがった…」

そんな光景がミラー越しに見えていたが、サイドミラーから田を離した途端、一台が横につけてきた。

「くつ！」

おれがハンドルを切つて幅寄せすると同時に、向こうもハンドルを切ってきた。

ガガガッ、ガギッ

ガガガガッ、ガガガッ

前に行かせないようにするおれと前に出ようとする囚人達の車が激しくぶつかり合い火花が散る。

おれの注意が左側にだけ集中した瞬間、もう一台の囚人達の車がおれの車の右横を駆け抜けた。

パンツ、パンツ、パンツ

一発目の音と共に、右のサイドミラーのガラスが割れた。

と同時に追い抜いて行つた車が左右に小刻みに揺れた。

そして、道のアップダウンに合わせて一回弾んだと思つた途端、車の裏が見えそのまま横転した。

「うわあ——！」

右前方で横転した車を避けようと思ひきりブレーキを踏み、思いきり左にハンドルを切つた。

キキキキ———

ガガガガガツ、ガギガギツ、

ガガガガガガツ

並走している車が邪魔でうまく左に避けることができない。

「うわあ————！」

ぶつかる！！

と思った途端、車が大きく左に動いた。

バキッ

パトカーに撃たれたサイドミラーが、横転した車にぶつかり吹っ飛んだ。

ド、ド、ド、ド

並走していた車はおれの視界からフードアウトし、左の駐道へと突っ込んで行つた。

おれの車は横転した車から30メートルくらいに行つたところでやつと止まつた。

「ふはー、やべ、死んだかと思つた…」

そう思つたのも束の間、パトカーのサイレンがおれの横を通過し、おれの車を塞ぐよつと止まつた。

バックミラーを見るともう一台はおれの後ろで止まつた。

パトカーから警察官が出てくるまでの間のほぼ一秒くらいだが、頭の中で無数の打開策を考えた。

しかし、逃走は不可能という判断しか下せなかつた。

「おー、そのまま動くなー動くなよー。」

前のパートカーから降りてきた警察官は銃をおれに向け、ゆっくりと近付いて来た。

「よしよし。そのままハンドルから手を離し、手を上に揚げろー。」

おれは諦めて警察官の言つことを素直に聞くことしかできなかつた。

「おまえらみたいなカスが日本をダメにしてんだよ」

警察官に車からさきずり降りされると、網走方面が小走りっぽうと光つたのが見えた。

「今、網走付近でおまえみたいな囚人と警察が戦つてんだよ。まあ、囚人なんか全員片つ端から捕まえてやるけどな」

渴いた音が国道に響いた。

一瞬時が止まつたよつて思えた。

おれを車から引寄せすり降ろした警察官がおれにもたれかかってきた。

異様な重さで、おれは膝の踏ん張りが効かず、警察官に押し潰されたような格好になつた。

「うふ、うふっと、ビ、ビ、うつたんですか……？」

完全に脱力した状態でなんの反応もない。

おれは身体に巻き付いた警察官の手をほじき、自力で警察官の下から這い出した。

「えつ……？」

辺りに街灯はなかつたが、パトカーのヘッドライトでおれの周りは比較的明るかつた。

「おい！大丈夫か！おい！」

倒れた警察官の制服はどうす黒く染まっていた。

それはおれの囚人服もどす黒く染めていた。

「おい…しつかりしるー…おい…」

途中で呼び掛けても返事が返つてこないだらうことがわかつた。

「おいーおいー」

おれは呼ぶふりしかできなかつた。

この警察官を撃つた銃口が一いつ向いているのが視界の左隅に入っていた。

「おいーおいー」

銃口を向けられているのに気付きながらも、いざとなると体が動かない。

「おい！おい！」

今撃つてこないといふことは、撃つ気がないのか、それとも焦らしているのか。

どちらともわからないが、この状況を開拓する策を考えねばならぬい。

引き金を引かれれば命がないという、この重圧の中、何も思い浮かぶことはない。

死の恐怖が常におれを支配するようになり、おれは段々と何も考えられなくなつた。

警察官の肩を抱き上げ、喉元を見た状態で身動きもせずに固まつてしまつたおれに、そいつは一言だけ発した。

「最後まで生き延びろ」

バタンと車のドアが閉まる音がした。

おれは体が固まつたまま顔を上げる「もやじきなかつた。

車が走り去つた後もしばらく動けなかつたが、雨粒がポツ、ポツ、  
と警察官を抱き上げた手に落ちてきたことで、我に返つた。

「……生を這ひぬ……へ、死にこつけ」だ?

雨足が少しづつ強くなつてへる。

「上等だよ。わけわからねえけど、何があつても生を這ひやるよ

おれは倒れている警察官から拳銃を奪い、サイドミラーが吹つ飛んだ車に乗り込んだ。

4月19日 北海道 国道

0 : 30

おれは車のワイヤーの動きを一段階早くした。

『99-325-363/130-000-000』

ハンドルを持たない方の手で携帯を開いたが、すぐに携帯を閉じ、助手席に放り投げた。

ブー

ブー

「…緊急速報か」

助手席に手を伸ばし、放り投げたばかりの携帯をまた掴んだ。

『0：33 網走刑務所に向かつた機動隊が全滅。脱走した囚人達が網走市を占拠した模様。囚人服が脱げない構造になつてゐるため、まずは服装を確認し、囚人には近付かないこと』

「機動隊全滅つて…」

車のラジオからも少し遅れて、同じような情報が流れてきた。

新たな情報として、特殊部隊が投入されることがわかつた。

また、各地で検問が実施され、囚人封じ込め作戦が行われているところだった。

なにがどうあれ、おれは新潟に戻りカオルを探すことを目的とし、アクセルを踏み込んだ。

4月25日 愛媛県高知県 県境

4 : 44

ブー

ブー

「ヒテ、また定期連絡きたよ。今生き延びてるのは… 350 , 99  
8人だつてさ。全国で見てももう4千万人近く死んでるつてさ」

「だいぶ減つたな。このゲーム始まつた時は200万人近くいたの  
にな」

ヒテがそう言いながら、車のフロントガラスにくつづいてくる『人  
喰い虫』をワイパーを動かして振り払つた。

「生き残るためとはいへ、この虫を喰つのはちょっと抵抗あつたよ  
な…」

「じょうがないだろ。喰わなきゃああなつてたんだから」

ヒーテが視線をやつた先には、黒い塊がいくつも転がっていた。

後部座席のマツナミはそんな外の様子を見る氣もなく俯いていた。

マツナミはいまだにハセガワ、イワキを引き留められなかつたことを悔やんでいた。

おれは運転中のヒーテに助手席から言つた。

「ヒーテ、おまえ頼れるやつになつたよな。大学もサボつてばっかりで、サークルでも酔い潰れてばっかりだつたのに、ホントに今は頼りがいがあるよ」

「変なこと言つなよ。今は生き延びることだけを考えるんだよ。あと24日で徳島県の靈山寺まで辿り着かないといけないんだからよ」

と言いつつも、ヒデの口元はまづりあらにむけていた。

あの時もそうだった。

鳴門大橋で毒ガスをまかれ、この『八十八ヶ所逆回り』のゲームが始まつた時だ。

ヒデは毒ガスの悲惨な光景に頭を抱え、頭を垂らしていたが、腕の隙間から見えたその口元は鳥肌が立つくらい不気味だった。

ゲームが始まるとヒデの助言により、おれらは携帯と貴重品だけを持つて、車ではなく自転車を奪つた。

幹線道路はヒテの言つよつに車で溢れていたため、自転車での行動の方が断然速かつた。

幹線道路から外れると車を奪つた。

道路が車で立ち往生している時は、線路に入り込みそこを走つた。

そんなことをヒテの指示でタイミングよくこなした。

結果、ゲーム参加者の中でも先頭集団に食い込むことができた。

ゲーム開始から10日程経つと競争相手も減つて来て、ある程度スマートに動けるようになつた。

それは全てヒテのおかげといつても過言ではなかつた。

「車盗んだり、お金盗んだり、人も殺したり……もう、やだよ……」

マシナミがやつとの思いで声を絞り出して言った。

カタ、カタ

カタ、カタ

しばらくワイパーの音だけが車内に響いた。

バックミラーからマシナミの様子を見ようとしたら助手席からどうまく見えない。

ブー

ブー

沈黙を破るきっかけをくれるかのように緊急速報が流れた。

『6・13 北海道紋別市が囚人達の手により陥落。囚人達の勢力は日に日に拡大していっている。』

また、それを支持する若年層を取り込みさらに巨大な組織へと姿を変えている。自分達の意思をしつかり持ち、騙されないこと』

「自分達の意思…か。政府はそう言つけど、今の若い者は面白半分、好奇心だけで囚人達についていつてるんだろ。こんな文書じゃ、なんの抑止力にもなんないよな」

「まあ、アキオの言う通りだよ。逆に増えるだらうね。北海道は戦争かあ。おれらは後戻りできない人生ゲーム中。負ける気はないけどね」

おれは人生ゲームがあ、と思いながら昔を思い出した。

小学生の頃に親に買ってもらつたボードゲーム。

何回やつても一番にはなれなかつた。

うまいやつ? 運のいいやつ? はいつもガツポリ儲けて、なんの障害もなく、悠々とゴールしていた。

いつもビリのおれは無駄に子供が生まれ、出費がかさみ、不慮の事故に見舞われ…

それでも、今思い返して見ると、結婚して子供が生まれて平凡に過ごすところじがおれには合っていたのだと思う。

それが幸せなんだとの状況になるとつづいて思つ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0983z/>

日本国民参加型ゲーム

2012年1月13日18時57分発行